
稿

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鵜
袴

【Nコード】

N4260V

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

狂気の美人科学者亜実は憎むべき巨人の本拠地を破壊する為に合成生物を創り上げようとしていた。しかしその出来上がった生物が彼女と助手のユウキにしたことは。科学を扱ったSFコメディ―です。

第一章

鳩

あまり正常でない科学者がいた。その名前を谷垣亜実という。

顔立ちはいい。はつきりとした流線型の目をしていて睫毛が長い。マユも整っている。程よい濃さだ。

口は普通の大きさと歯並びがいい。鼻は適度の高さだ。

黒い髪を奇麗にブローしており背はあまり高くないが奇麗な脚と腰のラインが白衣からも窺える。膝までのスカートに黒タイツがよく似合う。

胸もあまりないがその形はいい。本当に白衣がよく似合っている。しかも才媛であり日本でも生物学の権威として知られている。しかしであつた。

「ユウキ君、今度はね」

助手のだ。川上ユウキに対して言うのであつた。長身ですらりとしている。まるで運動選手、しかもサッカーのそれを思わせるスタイルである。

顔は頬が少し出ているが濃く強い眉が長くあり奇麗に伸びた高い鼻をしている。唇にはうつつすらと微笑みがありかまぼこを思わせる目も微笑んでいる。

髪は黒くさらさらとしている。やはり彼も白衣が似合っている。

その彼にだ。亜実は言うのである。

「面白いものを作るわ」

「面白いものといえますと?」

「究極の生物よ」

何かを目論む笑みでの言葉であつた。

「そう、あらゆる動物を合わせてね」

「えっ、またするんですか」

ユウキの返答は呆れた感じのものだった。

「この前それやって」

「あれね」

「そうですね。トマトとオリーブを同時に栽培できるようになって」
「パスタの為よ」

亜実は顔を顰めさせながら言った。

「トマトとオリーブは大事でしょ」

「パスタには必須ですね」

「それで二つを一緒にしたのだけれど」

「けれど結果は」

「だってあれじゃない」

ここで亜実はこんなことを言うのであった。

「普通に上にオリーブ、下にトマトじゃ面白くないでしょ」

「それで木が自分でも歩けるようにしたんですね」

「その通りよ」

亜実は顔を顰めさせながらユウキに答えた。

「だからああしたのよ」

「そのせいで街に出て自衛隊まで出動しましたね」

「ふん、あんな無能な連中」

自衛隊を罵ることも忘れなかった。

「私の偉大な子供達を全部焼き払ってくれたわね」

「あんな不気味なもの出て来たら誰だって焼きますよ」

「折角何処かに売りつけようと思ってたのに」

そんなことを目論んでいたのである。

「そして」

「そして?」

「私の偉大さを世に知らしめてやるチャンスだったのに」

「それが望みなんですね」

「私は天才よ」

おかしいな科学者が絶対に言う一言であった。

「そう、生物と植物のことなら何でもね」

「それでなんですか」

「それで今度は」

亜実はさらに言うのであった。

「あの憎むべき球界の癌よ」

「巨人ですね」

「ユウキ君は舞鶴生まれだったわね」

京都の舞鶴市である。雪の多い軍港である。

「それなら贛肩は」

「阪神ですけれどね」

「私はヤクルトよ」

ここでは何の接点もなかった。むしろ対立している。しかしであった。

「けれど巨人はね」

「嫌いなんですね」

「巨人こそは人類の憎むべき存在、それならばよ」

「それでどうするんですか？」

「その本拠地を完全に破壊してやるわ」

東京ドームのことだ。所謂ビッグエッグである。

「その為の究極の動物を今から作り上げるのよ」

「それならロボットにすればいいんじゃないんですか？」

「私そっちは知らないから」

生物や植物には強くてまだ。そちらはなのだった。

第二章

「だからね。それでよ」

「動物ですか」

「さて、何がいいかしら」

早速どんな動物にするか考えるのだった。

「どんな動物がいいかしら」

「どんな、ですか」

「やっぱり合成動物かしら」

まず考えたのはそれだった。

「例えば狸と虎と蛇を合わせた」

「鶴ですか」

「あれはどうかしら」

「ああ、あれ駄目ですよ」

ユウキは鶴については駄目だというのであった。

「鶴ですよね」

「ええ、あれは駄目なの」

「だって建物の上で鳴くだけじゃないですか」

源頼光の話を読む限りではそうだった。ユウキも一応京都人なので知っていたのだ。

「それじゃあドームを破壊できませんよ」

「そついえばそうね」

亜実も言われて気付いた。実際にそんな顔になる。

「それじゃあ何にもならないわね」

「だから別のにしないと」

「憎むべき巨人のドームを破壊するにはね」

「ええ。何でしたら北朝鮮の將軍様の銅像でもいいですけどね」

「あれは首領様だから」

親父の方だというのである。どちらにしても碌でもない。

「全く。私こそが首領様に相応しいのに」

「首領っていうかマッドサイエンティストですね
まさにそのままであった。」

「教授は」

「そうよ。まああの国は後よ
とりあえずはというのである。」

「とにかくよ。あの忌まわしい場所を破壊するね」

「そうした動物をですか」

「そうよ。何がいいかしら」

亜実我真剣に考えだしていた。悪いことである。

「ここはね」

「そう言われますと」

「ユウキ君の考えはどうなのかしら」

「そんなことはしなに限りませぬ」

彼の考えは至って常識的なものであった。

「あの、そんなことより人類社会に貢献するような研究をされては
どうでしょうか」

「そんなこと何も面白くないわ」

実際に面白くなさそうな顔で言う亜実であった。

「全くね」

「面白くないからしないんですか」

「そうよ。私が科学者になった理由はね」

「人類社会への貢献じゃないんですね」

「この世界に騒動を起こしたいからよ」
にやりと笑って言う。まさにマッドサイエンティストの言葉だっ
た。

「だからよ」

「全く。自分の才能の無駄遣いですね」

「それは主観の違いよ。私はその為に生きているのよ」

「だから警察に睨まれるんですよ」

「警察が怖くて科学者は務まらないわよ」
「ここでもマッドサイエンティストであった。見事なまでの。」
「そんなことをしてもね」
「全く。じゃあ今回も」
「ええ。とにかくユウキ君は反対なのね」
「賛成する常識人なんていませんよ、そんなの」
「ユウキは真剣に咎める顔になっている。」
「そりゃ僕も巨人は嫌いですけどね」
「好き嫌いで行動するのがマッドサイエンティストよ」
「自覚していた。尚悪い。」
「じゃあ私一人で考えるわ」
「諦めるっていう発想はないんですね」
「簡単に諦めてはマッドサイエンティストの名折れよ」
「また自分から言う亜実だった。」

第三章

「だからここはね」

「まあ作業や研究は手伝いますから」

「動物は私で勝手に考えろってことね」

「ええ、そういうことで」

こう話してであった。ユウキは亜実の助手に徹するのであった。何だかんだでこのマッドサイエンティストの手助けをするのであった。

そして亜実はだ。こんな生き物を考えだしたのだった。

「鹿の頭に馬の脚に翼を持ったね」

「その生き物の名前は？」

「ペリユトンよ。人の影を持っているけれど」

「それ、人殺しますよね」

ユウキはその異形の生き物のことを知っていた。

「カルタゴを攻める時に船でそこに向かっていたローマ軍を襲ったあれですよね」

「そうよ。それで東京ドームをね」

「人殺したら確実に捕まりますよ」

今でこそ捕まらないのが不思議だというのに、というのだ。

「それでもいいんですか」

「むっ、刑務所の中に入ったら」

「研究どころじゃありませんよ」

「そうね。それは困るわね」

「じゃあそれはなしってことで」

「仕方ないわね。考えてみたら人を殺すのは私の流儀じゃないわ」
「そうしたことは好きではないのだ。ただ好き嫌いの問題でしかないがそれでもだ。」

「じゃあこれは没ね」

「そういうことで御願います」

「じゃあ何にしようかしら」

あらためて考える亜実だった。

「ここは」

「人を殺さない動物にすべきですね」

「そういうことね。あくまで建物だけを破壊する」

そうしてだった。ここで出した生き物は。

「身長は血十メートルで口から放射火炎を出す黒い巨大な怪獣」

「何処かのプロダクションに訴えられますよ」

「じゃあ光の巨人は」

「同じですよ」

「くっ、裁判上等よ」

「そんなことで無駄にお金と時間使ってどうするんですか」

何処までも常識人のユウキであった。そんな彼がマッドサイエンティスト亜実と一緒にいるのだから世の中というものは実に不思議だ。

「そんな暇があつたら研究されるべきでは」

「そうね。じゃあそれもなしね」

「その方がいいかと」

「それじゃあ」

ここで、だった。また言う亜実だった。

「あれにするわ」

「あれとは？」

「鷓よ」

結局これに行き着くのであった。

「鷓の声に特殊音波を入れてね」

「特殊音波ですか」 80

「それでドームを破壊するのよ」

「成程、じゃあそれをですか」

「早速開発するわ。それじゃあね」

こうしてだった。亜実はユウキの協力を得てその鶴を生み出すのであった。

顔は猿、身体は狸、手足は虎、そして尾は蛇である。古典にそのまま出て来る異形の獣が姿を現したのであった。

研究室で目を覚ましたその獣を見てだ。亜実は会心の笑みを浮かべた。

「これでいいわ」

「何かあつという間に誕生しましたね」

「天才の研究は迅速なのよ」

自信に満ちた笑みでの言葉だった。

「そういうことよ」

「じゃあ早速ですか」

「ええ、東京ドームに向かわせるわ。けれど」

「けれど？」

「その前にチエックをしないとね」

それは忘れないというのである。科学者の基本は守っていた。

「実際にどれだけの威力があるのかをね」

「声で建物を破壊するそれですね」

「さて、どんなものかしら」

まずはそれを確かめるといっているのであった。

第四章

「それじゃあね」

「あつ、何か」

ここで、だった。鶴は今自分がいるその寝台の上で背伸びをした。そうしてそのうえでだった。その口を大きく開いて。

欠伸をした。その時に口が開いて声が出た。すると。

「!?!」

「えっ!?!」

亜実とユウキが気付いたその瞬間にだった。建物、二人がいる研究所が一気に崩れ落ちた。後に残ったのは瓦礫の山であった。

その瓦礫の中からだ。ユウキは何とか這い出た。全身、白衣は当然ながら汚れきってしまった。見れば亜実も同じ有様であった。

その彼女にだ。彼は言うのであった。

「あの、まさか」

「そうよ、そのまさかよ」

埃で汚れてしまった顔で言う彼女だった。

「声を出せばそれだけでよ」

「建物なら何でも破壊するんですね」

「そういうことよ。それでこうなったのね」

「そこまでわかっててなんですか」

「まさかここで欠伸をして声を出すなんて思わなかったわよ」

前を見ながらだ。こう言う亜実であった。

「そんなことはね」

「そうだったんですか」

「全く。誤算だったわ」

起こってしまったてからの言葉だった。

「これは」

「しかし。どうしますか」

「どうするかって？」

「だからですよ。研究所壊れましたし」

「そんなことはどうでもいいのよ」

「そんなことはというのである。亜実にとってはだった。」

「お金ならあるから」

「それが一番大事なんですけれどどうやってお金は工面したんですか」

「植物からお薬を作って売ってるから」

「話が何時に無く危ないものになった。」

「あれはね」

「あの、そのお薬って」

「大丈夫よ、麻薬とかそういうものじゃないから」

「それはすぐに否定する亜実だった。」

「胃薬とか便秘薬とか下剤だから」

「それだったらいいんですけれどね」

「流石に麻薬は流儀じゃないから」

「それでだというのである。」

「しないわよ」

「まあ麻薬なんてやったらすぐに足がつかますからね」

「殺人と麻薬はしないの」

「こうユウキに話す。」

「それは守るわ」

「とにかくお金はあるんですね」

「そうよ。だからそれはいいのよ」

「ですか」

「さて、この鶴は」

見れば寝ていた。何ごともなかったかのようだ。その場につずくまって丸くなってである。呑気な顔をして寝ているのであった。

「どうしようかしら」

「あらゆる声が建物を破壊するんじゃないですよね」

ユウキはこのことを真面目に指摘した。

「それはどうするんですか？」

「仕方ないわね。声はもう諦めるわ」

亜実も真剣に述べた。

「それはね」

「ですよ。無差別破壊なんて洒落になりませんから」

「それはそれでいいけれど」

ここではマッドサイエンティストだった。

「まあ研究所をいつも破壊されたらたまらないから」

「じゃあどうします？」

「声は普通にして」

とりあえずそうするというのだ。

第五章

「それにね」

「そこにあらたにですか」

「火を吐くようにしようかしら」

これが亜実の今の考えであった。

「それであの憎むべき汚れた場所をね」

「焼き尽くすんですね」

「ええ、そうするわ」

こうしてであった。亜実は今度は鵠に火を吹かせることにした。すぐに復活した研究所の中でその種術を行った。するとだった。

欠伸がそのまま炎の息になりだった。二人は。

それおもろに浴びてそうしてだった。

今度は黒焦げになった。ステーキ、いやローストになってしまった。

その黒焦げの顔でだ。ユウキは亜実に尋ねた。

「まだ諦めませんね」

「ええ、今度は氷よ」

「氷ですか」

「炎が駄目なら氷よ」

こうユウキに返すのである。黒焦げのその顔でだ。

「わかったわね」

「諦めたらどうですか？本当に」

「マッドサイエンティストは決して諦めないの」

誇りを以ての言葉だった。

「いいわね、じゃあ」

「やれやれですね」

溜息をつきながらもそんな亜実についていくユウキだった。そして今度は氷漬けになってしまふのだった。そんなことを繰り返し返して

いる二人であった。

だが。ユウキはそんな亜実にこう言うのであった。

「やっぱり僕はですね」

「君は？」

「この研究所にいますから」

一緒に昼食を採っている時にだ。笑顔で彼女に言うのである。食べられているのは天井とわかめうどんだった。亜実が作ったものである。

「教授と一緒に」

「何でかしら、それは」

「ここが好きだからです」

笑顔での言葉だった。

「だからですよ」

「そうなの。ここが」

「はい、確かに物凄くドタバタした場所ですけど」

マッドサイエンティストがいてはそうなるのは必然であった。

「けれどそれでもです」

「それでもって？」

「教授がいますから」

他ならぬ彼女がというのだ。

「ですから。ここにいます」

「言うわね。それじゃあね」

「はい、それじゃあ」

「これから毎日御飯は私が作ってあげるわ」

亜実は誰にも見せない優しい笑みで彼に告げた。

「それでいいわね」

「いいんですか、それって」

「いいわよ。むしろね」

「むしろ？」

「女にこんなこと二度も言わせないの」

こう告げるのだった。

「いいわね、二度とね」

「二度とですか」

「そうよ。私だってマッドサイエンティストである前に、それ以上にだとか。言葉が続けるのだった。」

「女だからね」

「だからですか」

「そういうことよ。わかつたらね」

「はい、その時は」

「食べて」

今あるその昼食をだというのだ。

「私の作ったその天井とおうどんね」

「わかりました。じゃあ」

「美味しいかしら」

今度はその味を尋ねる亜実だった。

「どちらも」

「ええ、美味しいですよ」

実際に食べてみてだ。そうだと答えるユウキだった。

「それもかなり」

「そう。ならいいわ」

そう言われてさらに笑顔になる亜実だった。

「じゃあこれからもね」

「はい、これからも」

こう話をしてだった。ユウキは亜実のその料理を食べるのだった。二人はこの時からまだ。共にいるのであった。それが彼等だった。怪しげな研究を続けながら。

2
0
1
1
·
1
·
7

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4260v/>

鶴

2011年8月2日03時28分発行